

「平原インディアン」のベルダーシュの一考察

——シャイアン族の「半男・半女」について——

Berdaches among Plains Indians—"halfmen - halfwomen" of the Cheyennes—

藤崎康彦

Yasuhiko FUJISAKI

要旨

筆者はこれまで「南西インディアン」に属する、定住生活が基本のアメリカ先住民について、「ベルダーシュ」の特にその社会的地位を考察する作業を続け、本紀要にも発表してきた。本稿は「大平原」にバッファローを追う狩猟生活を基本とする「平原インディアン」の一部族である「シャイアン族」について同様の関心から分析を行うことを目的とする。

シャイアン族のベルダーシュは「半男・半女」と言う意味のことばで社会的に認知されている。戦士たちが敵から奪った頭皮を与えられて、戦勝儀礼の主宰祭司になることが大きな儀礼的役割である。

これまで筆者はベルダーシュについて、自らは生殖から切り離された存在であるが、むしろそれ故に、社会全体の生殖力を活性化する呪術的機能があること、

その社会的地位を承認する通過儀礼が何らかの形であることを、「南西インディアン」の諸部族については主張できると述べてきた。

しかし、シャイアン族に関しては生殖力の活性化機能については同様に認めることができると本稿で主張するが、通過儀礼あるいはイニシエーションについては確認する資料を得られなかった。

シャイアンにおいては、特定の家族集団から「半男・半女」は出るとの情報はあがるが、詳細は検討した資料の限りでは不明である。成熟儀礼がないのはシャイアンの男性全体についていえることである。イニシエーションなどが「ない」ことから、逆にベルダーシュの社会的地位のあり方を考察する可能性を探ることが、今後の課題として残った。

I 序論

I-1 目的

筆者はこれまでアメリカ先住民のベルダーシュについて一連の考察(藤崎 2003, 2007a, 2007b, 2009a, 2009b)を公表してきたが、それらは普通「南西インディアン」といわれる、定住して主として農耕や牧畜に従事する部族についてであった。

ベルダーシュになぜ男はなるのかについてのステレオタイプの見方は、勇猛な戦士や狩人としての「男性」的な役割に耐えられないものが、女性の役割にいわば逃避するのであるとするか、生来同性愛的な傾向の者がそこに社会的・制度的位置づけを求めるとするか、のいずれかであった。前者は特にアメリカの初期の人類学者の普通の見解であったようだ。さらにこの見方は、特に大平原(The Great Plains、地理的にはミシシッピ川の西からロッキー山脈の東に広がる平野を指す)にバッファローを追い、異なる部族間で馬を奪い合い互いに戦闘を繰り返していた(最後は白人の西部開拓と共に生活の場を次々奪われ、合衆国騎兵隊と壮絶な戦いを繰り返したのだが、本来の戦士のあり方は相手の馬を奪うための他部族への襲撃であった)「平原インディアン(普通 Plains Indians と呼ばれている)」をモデルにして形成されたように感じる。

確かに「平原インディアン」の男たちの文化は「超・男性的(hyper-masculine)」ともいうべき、過剰に勇敢さや名誉を重んずる文化であるように見える。しかし、「平原インディアン」といっても語族の異なるい

くつかの系統があり、大平原に北方から移動してきた経緯も同じではない。「平原インディアン」として上記のごとき共通の文化的特徴が見られることは確かなのだろうが、部族ごとにかなりの社会的、文化的な差もまた認められる。

これまでの筆者の論考では、ベルダーシュの理解にはその社会ごとに、その社会がどのようなカテゴリーとしてベルダーシュたちを位置づけているか、関連する神話や儀礼、実際の社会生活に至るまで、個別にかつ可能な限り詳細に検討していく必要があることを例証してきた。今回も「平原インディアン」として一括りにせず、一つ一つの部族の文化についてこれまでと同様に検討することを目的とする。

しかし、「平原インディアン」とされている部族すべてについて同様のレベルで検討することは様々な理由で不可能である。比較的資料が多く、かつ筆者の立場でそれらを入手しやすい、いくつかの代表的な部族に絞らざるを得ない。従って、本稿はまず(日本の西部劇ファンなら良くその名を知っているであろう)「シャイアン族(The Cheyennes)」の検討を行うことを目的とする。

I-2 問題の所在

これまで、筆者は検討した部族のベルダーシュについて、概略次のような特徴を確認してきた。

① ベルダーシュが異なる性の役割をとろうとする理由は、生まれつきの

傾性が原因と理解されるか、思春期以前の「ビジョン (Vision)」（超自然的なメッセージとしての夢見や啓示）によるとされるかは社会によつて異なる。しかし、最終的にベルダーシュとして認められるに際しては、多くは思春期に入る頃、儀礼などを経て（ベルダーシュは現実には身体的には男である者が女の役割をする例が多いので）男とは異なる存在として社会的承認を受ける。

② 従つて、ジェンダーの観点からは、「男でもない・女でもない」特別な「人のカテゴリー」として理解できる。

③ 生殖にベルダーシュ本人は関与しない、つまり（男のベルダーシュの場合）子を産ませることも、（女のベルダーシュの場合）産むこともしないのがその本質であるが、特に男のベルダーシュの場合には、まさに生殖から切り離された存在であるが故に、儀礼などを通じて部族社会全体の生殖力 (fertility) を増すかのような、呪術・宗教的には逆説的な地位を占めているものと思われる。

④ 日常的には反対の性の服装と行動をとり、反対の性のメンバーとの交際を行う。男のベルダーシュについていえば、女の服装をし（それ故しばしば研究文献では「transvestite（異性装者）」として記述される）、料理などの家事や組織りなど女の仕事とされるものを行う。なお、この脈絡で付言すれば、しばしば古い文献ではめかされる「同性愛」的行動（男性ベルダーシュの場合、他の男性との性行為における受動的、女性的役割など）はこの地位に必ずしも本質的なことではないであらうと筆者は考えている。

⑤ ベルダーシュという制度の本質として、上記①に示唆されているような「例外的な個人」をその社会に（やむを得ず、寛容に）位置づける制度であることは間違いないように考える。③で示したように、社会の繁栄（成員の増殖）のためには一定数のベルダーシュは社会に必要であるとすら、むしろ積極的に考えられているのではないかと思う。つまりある集団のベルダーシュが欠けたら、必ず次のものを補充する必要とそのためのシステムを当該社会は有しているのではないかと思う。^①

以上をまとめれば、上記③に見られる、生殖からの切断、あるいは生殖の断念こそが本質的に重要なのではないかと思う。本稿でもこの観点から、シャイアンのベルダーシュが関与する儀礼の分析を前記①にも留意して行う。

なお付言すれば、④に関し、女の役割を日常的に果たすことが多いとしても、これまで検討してきた部族について、文献の限りでは育児に關与する例を筆者は見いだしていない。^②

I-3 方法

資料は従来通り文献による。平原インディアン諸族ごとのホーベルによる解説・批評付き書誌目録 (Hoebel 1977) に示された資料の多くは参照し、他の部族も含め関連した資料も合わせ検討した。シャイアンのものでも一般的にベルダーシュの考察に關係することがこれまでの経験

で期待できる神話、宗教、儀礼、社会構造などに関するものではない、たとえばシャイアンと合衆国政府との対立抗争の歴史が中心であることが明らかであるものなど (Berthrong 1963) は、入手はしたが主たる資料とはしなかった。

それらを検討した結果、本稿のテーマに関しての資料としては、信頼できるものはホーベル (Hoebel 1960) とグリネル (Grinnell 1923a, 1923b) のものに基本的に尽きることが明瞭になった。さらに言えば、ホーベルすらその概説書をグリネルに部分的には依存して書いていると思われるので、グリネルのものが中心になる。また、上記 Berthrong もシャイアン文化の概観の部分はやはりホーベルとグリネルに依拠してまとめているのである。勿論専門の人類学者が直接的な観察に基づいてシャイアンの儀礼 (サンダンス) とその社会組織を詳細に記述したもの (Dorsey 1905a, 1905b) もあるが、今回の議論の参考になる部分は、限定的である。ベルダーシュを考えるのに役立つ一次資料は、ホーベルとグリネル⁽³⁾、そして間接的な資料としてクローパー (Kroeber 1938) のものを使うことができただけである。

I-4 シャイアン族概観

シャイアンの社会と文化については紙幅の制約から最低限の紹介にとどめたい。論述の必要上どうしても上記の資料などから不可欠な部分を引用ないし紹介した上で論を組み立てる必要が多いので、重複を避けるためである。

シャイアンはアルゴンキン語族に属する集団で、大平原に南下してくるまでは現在のカナダの森林地帯に生活していたらしい。書かれた歴史に登場するのは一七世紀のことで、そのころは今のミネソタ州のあたりにいた。当時は野生の米の採取と大平原へ徒歩でバイソンを狩りに時折進出するような生活であったが、一七六〇年頃一部の集団が馬を得て使うようになり、一七〇〇年代の末か一八〇〇年代の初め (遅くとも一八三〇年代) には部族全体が農耕民的な生活をほぼ捨て、大平原に進出し、馬でバイソンを追う狩猟民になっていた。犬は飼育していたが、ほかの動物は決して飼養せず、狩りの対象にするのみの完全な狩猟民である。(主として女性たちが行う果実などの植物性食品の採集は別である。)

社会構造としては、「昔は」(一八九〇年から関わってきたグリネルのインフォーマントの言う「昔」)なので、歴史的に再構成できない、大平原への移動以前の時代には、の意味であろう) 母系出自の親族構造を持っていたとする見方がある (Grinnell 1923a:91)。しかし、一九三〇年代初めにエガンが詳細に調査をした時点では、双系的なかつ類別的な親族名称を持つ、キンドレッド的な構造が確認されている (Egan 1937)。ストロースもそれから更に半世紀ほど経ても基本的には変わっていないとしている。ただ、居住方式の変化のためか、父系出自に比重がかかりつつあるようだ (Straus 1994)。婚姻時の居住方式が妻方 (母方) 居住であることが母系的に見える要因かもしれないが、父方親族も母方親族も (あり方は違うが) 同様に子供には関わりを保っている。子供の目からすると親族名称としては、父の兄弟は父であり、母の姉妹は母である。

実の兄弟姉妹のほかに、父方母方区別なくいとは皆兄弟もしくは姉妹である。そしてそれらの人々のつながりは緊密で永続的である。

エガンの定式化に従えば、シャイアンの社会は一連の社会単位からなっている。基本家族、大家族集団、バンド、結社、そして部族である (Egan 1937:82)。基本家族は夫婦とその子からなる核家族である。大家族集団は household のことであるが、母のティピー (木の骨組みとバイソンの皮で作った円錐形の可搬性のある小屋) を中心に娘夫婦の基本家族が近接して住んでいる状態を指す。バンドは、夏などに野牛狩りのために関連のある大家族集団が集まって形成する。親族関係の概念でもあり、名のついたバンドは部族に十ある。ここから指導者を選出し、部族としてのシャイアンの「四十四人の評議会」が組織される。結社は基本的に部族全体を基盤として、軍事的、警察的機能を果たす。六ある。なお、以下に特殊な人物類型としての「the Contraries」について論じることが、結社の中にも通称として「The Contrary Society」と言われるものがある。しかし両者には直接的な関係はない。成員はバンド縦断的で、結社の所属変更もあるが、ほとんどは父やオジなど親族の関係で所属する。部族はサンダンスなど全成員が参加する儀礼の時に可視的になる。しかし「四十四人の評議会」を通して、対内的にも対外的にも一体性を認識できる。

I-5 シャイアンのベルダーシュの特徴

シャイアンにおいては、資料に見いだせるものはすべて男のベルダー

シュである。シャイアンの言葉で「hemaneh」(Hoebel 1960:83)、「Hee man eh」(Grinnell 1923b:39) などと表記されている。意味は英訳では「halfmen-halfwomen」すなわち「半男+半女」である。女のベルダーシュは資料には現れていない。以下表記は「半男+半女」とする。資料から読みとれる「半男+半女」の特徴を列挙すると次のようである。

- ① グリネルの資料によれば、「半男+半女」はある特定の家族集団から出ている。それは「bare feet」(裸の脚)とはおそらくレギンスをつけていない、の意味であろう。シャイアンに限らずアメリカ先住民では個人名などはその人の特徴や個性を捉えてつけられるのが普通である) という家族であり、グリネルのインフォーマントが自分の知識として知っていた頃 (おそらく一八五〇年頃より以前) は五人いたという。グリネルはこのほかにも「より近年」北部シャイアンに一八六八年に亡くなった「半男+半女」が、南部シャイアンに一八七九年に亡くなった同様の人がいたと記している。これらの人々は男の名前と女の名前と両方持っていたという。彼ら二人が最後の「半男+半女」であった (op.cit.39-40)。これはグリネルが本格的に現地での調査を行う以前の人々の話であり、グリネルが直接的な面識を持っていたわけではない。また、二人のそれぞれの出身家族の情報が出ていない。
- ② 「同じ家族集団に属している」とことと密接な関係があると思うが、「半男+半女」に関して社会的な通過儀礼、あるいはイニシエーション儀礼が行われることを窺わせる資料がない。もっともこれはシャイアン

社会の男性全体にいろん特徴であると理解すべきで、普通の男の子が大人になる（成人男性になる）道筋に、明瞭な区切りがないように見えるのである。ホーベルはシャイアンの少年にはイニシエーションないし成熟儀礼はないとはつきり述べている（Hoebel 1960:99）。彼はそれ以上は述べていないので、別途たとえば自伝を検討することなどで、具体的な人につき、その少年時代からの生活や内面的な自覚などを確かめる必要がある。

③「半男・半女」は普段のバンド生活では若者たちと娘たちの恋の仲介役、仲人役として期待されている。

④恋愛に関する呪術（love magic）を持ち、また普通の医療の知識と技能も持っている。ただし呪医（medicine man）的ではあってもシャーマンではない。（特にグリネルはshamanという言葉を使わない。シャイアンについてshamanということばが出てくる資料は、BertrungとLlewellyn and Hoebelのもののみである。）

⑤戦士（若者）たちが（敵対部族から馬を奪う）襲撃遠征に出るときには、求められて随伴することがある。遠征途上のエンターティナーとしても戦闘時の負傷者の治療介護役としても、「半男・半女」は期待される大事にされている。

⑥襲撃が成功し（馬のほか）戦士が敵の頭皮を取ると、（その最上のものは）「半男・半女」に与えられる。キャンプに凱旋したとき「半男・半女」は「頭皮踊り（scalp dance）」を祭司として主宰し開催する。後に詳しく検討するが、「頭皮踊り」は戦勝の祝いであると同時に、若

いカップル形成の仲立ちの場でもあるような社交的な、キャンプ全員が参加する正式な祭である。

⑦グリネルもホーベルも「半男・半女」のセクシュアリティについては一切言及していない。むしろ、クローバーによるアラバホ族の民族誌の中で、曖昧な伝聞のような形で見いだすことができる。それによれば「半男・半女」の中には男の二番目の妻になっているものもあり、また男と（受け身の役割の）性行為をされるとされている。¹⁾

⑧南西インディアンと異なり、シャイアンには神話といえるような口頭伝承は少ないらしく、資料でみる限りでは「神聖な物語」としての文化英雄やトリックスターの話があるくらいである（Grinnell 1971, Dorsey 1905a）。世の始まりや事物の起源を物語るものは貧弱で「半男・半女」の起源を神話に探ることは難しいようである。性的に例外的な存在についての北アメリカ先住民の神話や伝説を集めたアンソロジーにもシャイアンは収録されていない（Elledge 2002）。

II 本論

II-1 論点1 「頭皮踊り」にみる象徴性

II-1-1 グリネルとホーベル

「半男・半女」の特徴のまとめにおいて、やはり「頭皮踊り」における「半男・半女」や頭皮の象徴的意味の理解が重要な論点として認識されるべきであろう。しかし、頭皮と頭皮踊りについて、グリネルとホーベル

はほとんど対照的な異なる見方をしている。

1 グリネル

グリネルは「頭皮踊り」については match-making の意味もある戦の祝いの踊りであると、機能的あるいは客観的に評価している。頭皮については、勝利の記念品 (trophy) に過ぎないと言う。記念品として頭皮自体には意味はなく、身体その他の部分でもよいとしている。このように、「頭皮踊り」をなぜ「半男・半女」がやるかについては特に関心を持っていない。つまり、頭皮や「半男・半女」の象徴的意味については論じていない。

2 ホーベル

これに対して、ホーベルは頭皮に(男性的)活力、生命力をみて、「頭皮踊り」を生命力高揚の場と理解する。「半男・半女」の役割、意味については、男性的な性的行動を断念することで、戦闘における戦士の活力を賦活する意味を認めている。これは彼独特の象徴的、あるいは精神分析的な「エネルギー理論」ともいえる考え方に基づいて論を展開しているからである。

II-1-2 分析

以上の様な対立的ともいえる見方において、本稿の関心からはホーベルの説を詳しく検討することが必然となる。その上で批判的に分析し、

筆者なりの見解を示したい。

しかし、ホーベル、グリネル双方の検討に共通の前提として必要な「頭皮踊り」の様子を先ず資料として提示するのが論述上適切であろう。グリネルのものはその詳細で正確な記述によって、ホーベルも依拠しているものなので、グリネルに従って、引用、紹介をしたい。

II-1-2-1 「頭皮踊り」

グリネルは、「現代」(ここでの現代とはグリネルが現地調査をしていた一九世紀末から二〇世紀初頭の頃と考えてよい)の頭皮踊りは昔のそれとは全く異なってしまうという。そういう(昔のスタイルの)ものは、彼がインフォーマントから聞いたところでは一八五二年に行われたのが最後であるようだ (Grinnell 1923b:38)。全部で五つの踊りからなるこの儀礼は、完璧に定式化されており、歌も良く知られていてそれらは印刷されているかの如くに変換することがないとグリネルは言う。あらは意味では勝利の踊りであるのだが、それはまた性格として極めて社交的なものでもある。グリネルは、以下に提示する説明は、(シャイアンのインフォーマントである) George Bent から得られた、として次のように言う。シャイアンのペルダージュの理解に必要な部分であるので、引用する。なお以下の引用文中の()内は筆者の補足ないし注である。「」で囲った部分は原文内の注ないし補足の部分である。

これらの昔風の頭皮踊りは、*Hee mán eh* すなわち「半男・半女」

といわれている、普通は年寄りの男⁽¹⁾（傍線部強調は筆者）の服装をしている、小集団の男たちによって指揮される。彼らは全員が同じ家族あるいは（家族的）集団に属していて、そこには Oak [Oumsh]（シャイアンの人名、盾を作る人物、グリネルのインフォーマントの一人）も属している。この家族は *Qun'ha nñ* すなわち「裸の脚」と呼ばれている。これらの「半男+半女」は当時は五人いた。彼らは男性ではあるが女性の生活のし方をしていたのである。彼らの声ですら、男と女のその中間的なものに聞こえた。彼らは大変人気があり、殊に若い人から、既婚者未婚者を問わず、好まれていた。というのは男女の仲を取り持つ（ことで）有名な人物であったからだ。彼らはすばらしい恋の語り手であった。もしある男が少女と一緒に駆け落ちしてもらいたいと思った場合、彼はこの「半男+半女」たちの誰かの手助けを得ることができれば、ほとんど失敗することはない。若者が娘に贈り物をしたい（すなわち求婚したい）と思ったら、この「半男+半女」の一人に、結婚をとりまとめる話をするために、娘の親族の許に行ってもらおう（op.cit.:39）。

このような「半男+半女」は戦闘集団の遠征（warpath）について行くことがある。同様グリネルを引用する。

戦闘部隊が発する準備をしているとき、これらの人（「半男+半女」）の中の一人が随伴してくれるよう頼まれることがしばしばあ

る。実際に昔は大きな戦闘部隊は彼らの一人ないし二人を連れることなしには出発することは希であった。彼らは良い連れであり、巧みな語り手であった。彼らが部隊についてゆくと、彼らは丁重に扱われた。彼らは行われることすべてを見守り、戦闘の時には負傷者の手当をした。彼らは手当に巧みであるが、それは医師や呪医であるからだ。

戦闘の後では、最上の頭皮は彼らに与えられる。帰路、村（キャンプ）が見えるところになると、彼らは頭皮を竿の端につけて（高く掲げて）進む。戦闘部隊が村に近づくと、（聖なる）パイプを持っている男たち——すなわち戦闘部隊のリーダーたち——と頭皮を掲げている「半男+半女」が部隊より一足先に進み、村の外側に竿につけた頭皮を振りながら馬で駆けて回る（op.cit.:40）。

キャンプに帰るのは、朝方なのだが大規模な頭皮踊りは日没後にキャンプの中心の広場で行われる。「半男+半女」は日中に人々に呼びかけ薪を用意させ、それを広場中心部に互いに立て掛けるように円錐形に組み上げる。この薪積みは大きな焚き火となるのだが、「[skunk /hka' o]」（スカンク）と呼ばれている（op.cit.:40-41）。

「頭皮踊り」についてはグリネルに従い要約的に紹介する（Grinnell op.cit.:40-44）。

スカンクは主に既婚の中年の男性たちからなる歌い手たちと太鼓打ち

たちが歌を始めると火がつけられる。人々が集まり、頭皮踊りは始まる。広場は、個々のテントが円形に配置されている中心部の空き地なのだが、東側だけはテントはおかれず、いわば円の開口部になっている。この広場の西側に歌い手と太鼓打ちたちは列をなして中心部を向いて位置する。若者たちは南側に列をなして北を向いて並ぶ。反対側の北側に、若者たちのいる南を向いて娘たちが並ぶ。年寄りの男女は若者の列の端のあたりに西を向いて並ぶ。つまりスカンクのある中心部を囲んで人の列が四角形を作る。この四角の中程に「半男半女」は彼らの位置を占め、踊りの監督となる。彼ら以外は誰もこの四角形の中には入ってはならない。

まず「Sweethearts' Dance」が行われる。この踊りの後、「半男半女」は太鼓打ちたちの前で踊るが、頭皮をつけた竿を持ち、踊りながら頭皮を振る。反対の端では年寄りの女たちが同じように竿に頭皮を結びつけて持ちながら踊る。このとき、息子が「クーを当てた」年寄りの男たちも列の端の方で踊る。これらの年寄りたちは、しばしば道化の役を果たし、人々を笑わせる。

次に「Match-making Dance」が行われる。「半男半女」が若者、娘それぞれのところに行き、(踊りの)相手としてそれぞれ誰が好ましいか希望を聞いて、踊りの組み合わせを作る。

三番目の踊りは「Round Dance」といわれ、次のようなものだ。しばらく踊った後、「半男半女」は「自分の相手を選びなさい」と大きな声で呼びかける。若者も娘も意中の人のところに行って組ができる(若者

と娘の数は同じになるようにしてある)。中心の大きな焚き火をめぐる輪になって踊る。「半男半女」はこの輪の外側を常に右回りで踊ってゆく。頭皮をつけた竿を手持って、踊っている若者と娘に近づこうとする(まだ踊りに加われない幼い)少年少女たちを追い払う。

しばらくして「半男半女」は四番目の踊りを告げる。これは「Slippery Dance」といわれる。ここでは娘たちだけが、ペアを組んで踊り、若者たちを誘う。

この踊りの後、「半男半女」はしばらく休憩とるよう踊り手たちに伝え、列を作っていた人々はバラバラになる。この間娘たちは次の踊りに備えて服装を整える。

最後の踊りは「Galloping Buffalo-Bull Dance」である。休憩の後、「半男半女」は皆に元の位置に戻り、座るよう指示する。座った姿勢で歌と太鼓が始まると、娘が三、四人立ち若者たちに向かって踊り始める。男たちに近づくとき身を屈め、背を向けて彼らの前で踊る。同じ数の若者が立ち、娘たちに加わりながら踊る。男たちも屈む。次々にこのようにして男女が加わり最後はすべての男女(若者と娘)が一緒に長い列を作り、雄牛が駆けているように皆屈みながら踊る。「半男半女」は「輪になって踊れ」と指示すると踊り手たちは体を起こして輪の踊りを始める。このときには太鼓打ちや歌い手たちも輪に加わる。この輪の踊りでは、踊り手たちも歌いながら踊る。このころにはほとんど夜が明ける。踊りは解散し、人々は家に帰る。

これら(五つ)が皆頭皮踊りである。

II-1-2-2 頭皮踊りに関連するホーベルの理解と

「半男・半女」の評価

ホーベルはシャイアンの世界観について独自の考察をしている。シャイアン男性にとっては、男性の性的な力、精力 (male sexuality) あるいは virility) とは、力の源として節約し大切に使うべきものとホーベルは考える。それは文化の様々なところに表現されており、シャイアン男性のパーソナリティーにも組み込まれていると考える。その現れの一つの場が頭皮踊りなのだが、その前にシャイアン独特の「エネルギー理論」とも言うべきものが分かるとホーベルの言う「セリバシー」について説明しておきたい。

先ず彼は次のように言う。

シャイアンたちが明示的なエネルギー理論をもっている証拠はなにもないが、ある種の暗黙のエネルギー理論をもっていることはきわめて明白である。いかなる (個別の) ものについてであろうと、世界それ自体についてであろうと、その総エネルギー量は有限のものとして考えられている。そのエネルギーが活動を通じて消費されると、それは霧散し減少する。かくして植物は枯れるし、動物は数少なくなるし、大地は衰える。もし人々が生存を続けようと思うなら、エネルギーを更新することで再生することが必要である。諸儀礼が各部分のエネルギーの再充填と再調整 (再建) を作りだし、それによって全体がその全面的な潜在的活力で動くのである (Hoebel

1960:90)。

この引用中の「諸儀礼」とはシャイアン (のみならず「平原インディアン」に共通している) の最も重要な儀礼である「聖なる矢の更新」儀礼や「サンダンス」を指している。この有限なエネルギーは男性の性的なエネルギー (virility) についても同様のことが成り立つ。従って、男性はその節用に努めなければならない。それが表現されているのが結婚後の男性の「セリバシー」である。該当の観念についてのホーベルの考えが現れている箇所を続けて引用する。

この観念はシャイアンのセックスに対する態度に明瞭に示されている。性的なエネルギーは (各人への) 限られた配分しかなく、節約しながら使わなくてはならない。従って、強い性格とよい (優れた) 家族の男は彼の最初の子の誕生の際「ことにもしそれが男の子である場合」には、七年か十四年の間は次の子は持たないと誓約する。父親の生育させる力のすべては、従って何人かの子の間で使い果たされるといよりは、この一人の子の成長に集中することになる。受胎させる精子が子供の成長を始めさせるという以上のことであることを理解する必要がある。父親の「エネルギー」が親から子へ (受胎後も) 継続的に伝わっているのである。この方法による子供への専念は節制と儀礼によって戦に使う馬を発育させることによく似ている。

七年ないし十四年の長期間父親は完全なセリバシーを、複数の妻をもっているのではない限り、行わなければならない。献身を受けている子供の母親もこの期間疑いもなく禁欲をしなければならない。ただし、夫が「矢の更新」や「サンダンス」を誓約して行う場合は別である。その際は、その特別な機会に儀礼を指導する祭司と性交を行うことがあるからである。姦通はシャイアン族の間では極めて希なので、たとえ秘密裡のものでも、性的な欲望の利用可能な捌け口とはならない。献身の誓約を仮にいずれかの親が破るようなことがあると、そのことで子供は死ぬと信じられている。子供のためのこのような断念の行為において要求される自己抑制の試練に自ら服する程多くのシャイアンの男たちが強いわけではない。しかし、それを行う男たちに対しては、最高の社会的評価が与えられている。私（ホーベル）自身の親しい友人である High Forehead（彼はグネルの有能な通訳でもあった）はそれを行った一人である。事実、彼の最初の子の誕生と二番目との間には十五年の間隔があった。彼の長男は、私が彼に会ったときは、身体的にも知性的にも最も優秀な人物であった。High Forehead は息子をそのように育てるのに彼が果たしたと感じている役割を密かに誇りにしていた。「私は（誓願の）その期間いつも妻とともに寝ていた。しかし一度も彼女と性行為は持たなかった」と彼は話してくれた。年を取ってからは、彼は北部シャイアン族の中では最も尊敬されている男たちの一人であった (ibid)。

こういう男性的なエネルギーは当然戦闘や狩りなどの男性の役割の際にも働く。男性的な力が強ければ相手を圧倒することができる。そしてそれをいわば保証してくれるのが、「半男―半女」なのであると考える。彼の考えがよく現れているところを引用する。先ず戦闘に関しては、

これらの人々（「半男―半女」）は性的な昇華——すなわち性的な節制と彼らの元々の性の否定——を通じて、偉大な力を達成しているように見える。われわれは直接的（強調はホーベル）な証拠をなにも持たないが、彼らが襲撃部隊に共にいることは、主に彼らの貯留された精力 (virility) ——それこそが勝利する戦には必要なものとシャイアンが正に感じるものである——の高度な心理的（強調はホーベル）潜勢力のために望まれているということは、ありそうに思える (op.cit.:83)。

とするが、実は男性の性的な力の特殊な制御のあり方については、もう一つ「半男―半女」とは異なる存在を対比的に取り上げて論じている。それは「the Contraries」と言われる特殊な男性たちである。彼らは言われたことに対して強迫的にそれと反対のことを言ったりやったりするのでそういわれている。いわば「あまのじゃく」というのがびつたりなので、ここでもそう表記することにする。彼らは神経症的に雷を恐れ、そのために特別な「あまのじゃく」になることを社会的に誓約すること

で、その不安から逃れる。実際には既に「あまのじゃく」である人から彼らのみが持つ特別な弓を譲ってもらうことで、その地位を得る。「あまのじゃく」は恐れを知らない、過剰に勇猛な戦士とされている。ホーベルは「異性装者になることで男性の戦士役割を拒むわずか一握りの男たちがいる (op.cit:102)」として「半男・半女」を指して、それに対して「あまのじゃくたち」は「制度化された形態で極端に誇張して戦士役割を過剰に行う (ibid.)」存在として次のように述べる。

第一の重要な事実は、「あまのじゃくたち」は結婚しないことである。もし彼らが結婚したら彼らは槍を手放し、普通の人のように振る舞わなければならないことである。第二の事実は戦闘において極度の無謀ともいえる大胆さをもつて、(あえて) 死を求めることである。しかしながら、彼らの槍は彼らに「大いなる幸運」をもたらすもので、彼らはなかなか死ぬことはない。これらの二つの事実を合わせ考えると、次のことが示唆できる。すなわち、「半男・半女」と同様に、「あまのじゃくたち」は性関係と彼らの男性的活力 (virility) に神経症的な不安を抱いている。「半男・半女」は彼らの男性的性行動 (sexuality) を全面的に拒絶することに彼らの逃げ場を見いだしているのに対し、「あまのじゃくたち」は異性間性行動 (heterosexuality) を誇張された男性性で (を通じて) 拒絶することに正当性を求めようとしているのである。

「あまのじゃくたち」の象徴は「雷鳴弓 (the Thunder Bow)」であ

る。呪術の羽で飾られ、一端に槍の穂先をつけた特別な弓である。ふつうの槍は完璧に優れた武器であり、性的な象徴的意味を付与される場合もあるし、そうでない場合もある。この「雷鳴弓」は武器ではない。しかし、それは戦に携行され、ただ「クーを当てる」ことのみに使われる。その先端は決して大地——生命を育むものであり、女性性の本質である——に触れてはならないことは意味深い。象徴的には、「雷鳴弓」は男性生殖器がそれに括りつけられていてかつ抑制されていることを示唆する。

「あまのじゃくたち」の地位の性的意味合いを示すさらに二つの事実がある。まず「あまのじゃくたち」は決して寢床に座ったり横たわったりしない。二つ目に、人は「あまのじゃくたち」に「雷鳴や稲妻を恐れている」からなるのだということである。彼は「あまのじゃく」にならなければならない、そうすればこの不安は癒されるだろうということを夢に見る。「サンダーバード」は、そこから「あまのじゃくたち」の偉大な超自然的能力が由来するのだが、男性的形象である。

異性間性行動を拒絶していることで、「あまのじゃくたち」は通常の社会関係も拒んでいる。彼はキャンプの小屋すべてから離れた場所で、単独で住まなければならない。社会関係でやることはなににせよ、(普通と) 逆のことをやる。彼に何か頼むと、彼はその反対のことをやる。戦闘においてすら、他の戦士と並んで、あるいは先頭に立って、もしくは戦友の驥尾に付して敵に襲いかかることはでき

ない。(戦闘に出るときも) 隊列からはずれて両翼のいずれかに単独で位置していなければならない。彼が「雷鳴弓」を右手に持てば、彼は退却しない (ibid.)。

また、「あまのじゃく」であることは不安にとらわれた神経症的な状態(すなわち社会生活が円満に送れない状態)なのだが、同じように「半男半女」が臆病などにより男性役割を忌避する(あるいは同性愛的性向による)のであっても、「あまのじゃく」や「半男半女」であることは、どちらも社会にとって有益な「捌け口」になりうると考えていると思われる。

「頭皮踊り」については次のように言う。

成果を上げた襲撃部隊とは、一人もシャイアンの損失を出さずに敵の頭皮をとってきた集団をいう。ただし、殺される前にそのシャイアンがクーをとつていれば(当てていれば)、損失には数えない。敵のクーを最初にとる前にたつた一人でもシャイアンが殺されていれば、他の者が取った頭皮はどれであれ捨て去られる。しかしながら、戦闘でシャイアンは成果を上げ、損失なく敵の頭皮を取つていれば、その頭皮は「頭皮踊り」の為に持ち帰る。戦闘からの帰途、すべての頭皮は「半男半女」の管理下におかれるという事実は、戦士たちは彼らの成果がこれらの人物たちが参加していたお陰である

と感じていることを示す。勝利の踊り(「頭皮踊り」)が「半男半女」に全面的に監督される事実は、戦が男性の生殖力(virility)に関連することを強調している。敵に勝る力の確認はシャイアンの男性性の確認でもある。このことのために生殖力(virility)は節約(有効活用)されねばならず、「頭皮の踊り」の祝勝においてその神格化を受けるのである (op.cit.:83)。

さらに「頭皮」に関しては次のように言う。

大規模な襲撃部隊によって成功裡になされた襲撃に続く「頭皮踊り」はシャイアンたちが勝利を適切に管理されたセックスと結びつけている様子を同様に示している。アメリカインディアンの頭皮剥ぎは世界の他の地域の首狩りと同等のものである。首を取ることも頭皮を剥ぐこともどちらも共に殺した相手の超自然的な力と生命力を勝利者の力に加えることが目的である (ibid.)。

論述の途中でホーベルの「エネルギー理論」における「半男半女」の象徴的なかつ性的な意味をより明瞭にするために、「あまのじゃく」と対比的に比較したが、「半男半女」について言えば、次のようにまとめられよう。

①「半男半女」は性の昇華(男性としてのセクシュアリティの断念)に

よって性のエネルギーを貯留し、それを戦において戦士たちに備給している。

② 頭皮は人（敵）の超自然的な力と生命力（それが戦士のものなら *virility*）を我がものにするために取る。

③ 戦に勝利し、敵の頭皮を取れば、それらは「半男半女」に与えられることが、勝利には彼らの超自然的な力の貢献があったことを示す。

④ 「頭皮踊り」は *virility* を神格化する祝祭である。

ホーベルは頭皮を頭部の換喩的な置き換えと見なして、首狩りの習俗に結びつけていることから分かるように、人類学的な常識的な見方として受け入れられやすい仮定を媒介項として挟みながら論を立てている。しかしながら、グリネルは頭皮には記念品的な意味しかない、シヤイアンの生活の長く密接な観察から断言している。頭皮一つとっても、また「半男半女」のセクシュアリティについてもホーベルの見方を全面的に受容することには躊躇を感じる。同じ比較をするにしても首狩り（これは南アメリカのアマゾン地帯の先住民にも、日本を含めたアジア地域にも広く見られるが）よりも他のアメリカ先住民の頭皮についての見方と比較する方が先なのではないかと思う。たとえば同じ「平原インディアン」の一つ、現実の歴史においても関係の深いスー（The Sioux）族と比較してみると、異なる見方が可能になる。

II-1-2-3 スー族と頭皮

これまでの議論の範囲でスー族とシヤイアン族を比較するとスー族についていくつかの重要な違いが指摘できる。

① スー族では頭皮は女性親族に与えられる。

② 与えられた女性親族は女性だけで祝勝の「勝利踊り（頭皮をもつて踊るので、「頭皮踊り」と言うべきものである）」を行う。

③ 若い男女がともに参加する（*match-making* の意味も含んでいると思われる）社交的なダンス（儀礼）は「Night Dance」として「勝利踊り（頭皮踊り）」とは全く異なるものである。

④ スー族にもベルターシユは知られているが、「Night Dance」とも「勝利踊り」とも関連を持たないようである。

頭皮は女性親族に与えられることに気づいた最初は、スー族男性の自伝である *Black Elk Speaks* を読んでいた時である。頭皮をスーの戦士が剥ぐ話のところで、編者が注をつけていて、キャンプに戻った時、それを女性親族に、「Victory Dance（勝利踊り）」で持ち歩く（見せびらかす）ために与えると記していた（Neihardt 2008:82）。もしホーベルの言うように頭皮には *virility* が関連づけられる（籠もっていると見なされる）のであれば、それは危険なもので、女性親族に与えることは象徴的にきわめて不穏当なことではないかと感じた。スー族の包括的な民族誌として希少で優れた価値を認められている（Hoebel 1977:35）⁷ Hassrick

の *The Sioux* を参照すると、頭皮は優先順位からすると先ず男の姉妹に与えられ、姉妹がない場合（類別的に姉妹と同じ価値を持つ）女性のいとこ、三番目に母の順に与えられる。ここまでは親族だが、これらの誰もいない場合に与えられることもあるようだ。なぜ優先的に姉妹に与えられるかは、スー族の兄弟姉妹関係の緊密さに理由がある。彼らは終生続く愛情の籠もった、かつ気前のよい、互恵的贈与交換関係にあり、姉妹は兄弟に（戦に出る時の）モカシンを作って与えたり、子どもができた（甥や姪の）ゆりかごを贈ったりする。頭皮はこれらの女性親族の贈与に対する男からの返礼であり、敬意の表現なのである（Hassrick 1964:109ff.）。やはりスー族においても頭皮は勝利の記念品の意味が基本であると考えなければならず、その点ではグリネルと同じ見解にいたる。

II-1-2-4 中間まとめ

論点1については、これまでの資料と議論をまとめれば以下の諸点を指摘できるだろう。

- ① シायアンの「頭皮踊り」はホーベルのような男性的な *virility* と関連づけるよりは、むしろ女性の *fertility* に結びつけて理解する方が、象徴的には親和的に感じられる。それは次のような理由からである。
 (i) 「半男半女」はシायアンの社会では仲人的な媒介役が明確に認められること。
 (ii) 「頭皮踊り」はやはり若い男女の社交的な *match-*

making な場であると認識されていること。(iii) 踊りの次第を見ても、踊りが進むにつれ、かなり女性の側が積極的になり、むしろインディアタイプを握っているように感じられること。(iv) ことに第四の「Round Dance」では娘が恋人たる若者を誘い、若者の姉妹が恋人たる娘にブレスレットなどの装身具を贈り物として与えるまで若者は「解放」されないような踊りであること。(v) 第五の「Galloping Buffalo-Bull Dance」では繁殖して大群になったバッファローの疾走を模して皆が踊るのだが、それは性的熱狂 (*orgy*) と部族成員の繁栄の両方を感じさせるものと思われる。もちろん実際の男女関係は極めて節度のあるもので、ことに女性の貞操観念は極めて堅固であるとされるので、このような祭りにあがちな放縦は生じない。しかし、ここで若い男女の間柄をはつきりとかつ社会的に認知させる効果は持っているよう。つまりこの踊りにおいては女性が主体になり、むしろ女性の生殖力が賦活される場と筆者は考えたいのだが、ホーベルのエネルギー理論同様、筆者も直接的な証拠を示すことができない。

- ② 「頭皮」についてはホーベル的な意味づけは適切ではないだろう。やはりグリネルの言うように、戦勝の記念品なのである。しかし「頭皮踊り」において、竿の先に付けた頭皮を振り回し踊りを活気づけるのは *virility* と *fertility* とも切り離された「半男半女」と老婆であるという事実は、やはり意味深く感じられる。(生殖から切り離された存在が手にしている)「頭皮」が *fertility* を賦活させるのだと言いたくなる。その点で、筆者もホーベルと同じように「頭皮」に(も)意味

を読み込むのだが、方向は反対で fertility なのである。

③「半男・半女」については、儀礼の場、普段の生活、戦闘集団への随伴などそれぞれにおける姿はいくら分かったが、それでも不明なことが多い。ことに服装については、「頭皮踊り」のグリネルの引用文中に強調して表記しておいたが、「年寄りの男」の服装をするというのは分からない。ホーベルは女性の服装をすると書いているので、グリネルの方は誤植かと思われるが、何とも言えない。この点について他の研究者が問題視していることも見ない。今後思いもかけぬところから解けるかもしれないが、現状では不明のままにとどまる。

④まとめれば、Ⅰ-2の③で述べた、生殖から切り離されたベルダーシュ（「半男・半女」）が部族全体の生殖力を賦活する逆説的な象徴的機能は、シャイアン族でも認めることができるといえよう。

Ⅱ-2 論点2 ベルダーシュの社会的地位とその獲得の仕方

他の社会（少なくともこれまで検討してきた南西インディアン）と比較して、ベルダーシュになる、あるいはベルダーシュとして社会的に認識される、に際しての通過儀礼などは「半男・半女」にはあるのかないのかすら不明なくらい情報が少ない。特徴的なのは特定の家族的集団が出身母胎であるようであることだ。これはいわば「家系」でその地位につくことが定められているのだろうかと思いたくなるが、それを確かめる情報はない。

ここではそもそもシャイアンの男性には公的な通過儀礼やイニシエーションはなく、各人の成熟と能力によって社会的評価が得られるのであるという社会的特徴から逆に推論してゆくしかない。

たとえば、モハーベ族の場合は、男の子の標準的な成長の過程が想定されていて、ベルダーシュであるアリハはその過程のある時点でそこから離脱あるいは分岐する形で社会の公的な認知を得る（藤崎 2009b）。これに対して、シャイアンにイニシエーションあるいは成熟儀礼がないということは、逆に、普通の男とは異なる存在として自己を形成する契機もないことを意味するだろう。

勿論男の子の自己形成の目標は生まれた時点で定められている。立派な狩人であり戦士であるような男になることだ。ただそれが、個々の少年についての周囲の評価によって達成されるのである。一定の年代の少年たちをひとまとめにして集団に加入させるような、年齢集団的な制度は（持っている北米先住民もあるのだが）シャイアンにはない。これでは「半男・半女」はどこで自己の社会的アイデンティティを得るのかわからないであろう。

そういう状況の時、初めから一定の家系のものを指定しておくことは、一つの解決法として理解可能である。

しかしながら、直接的な確認ができない以上、シャイアンの少年の成長の過程を自伝などを手懸かりにたどってゆくことで、一人前の戦士としてのアイデンティティの形成過程を見ることは、考察の方法として有効なはずである。しかし本稿では紙幅の制約から不可能である。この作

業は関連した別稿に委ねることにした。

III まとめ——結論に変えて——と今後の課題

これまでの議論を通じて、シャイアンのベルダーシュも、これまで見てきた南西インディアンのベルダーシュ同様、集団全体の多産性(fertility)を刺激する象徴的機能があることは確認できたと言える。

しかしなぜ一定の家族的系統から出るのか、地位の承認などのイニシエーションはどのようなものかなどは、全く理解できなかった。これについては、男にはイニシエーションがないことを確認し、そこから逆に論証するしかないと思われる。しかし、「ない」という否定の証明は人類学の分野では一般に極めて難しい。それを、女のイニシエーションと対比したりしながら、何とか追求する努力を今後も続けていきたい。

文献

- Berthrong, D. J. 1963. *The Southern Cheyennes*. University of Oklahoma Press.
 Dorsey, G. A. 1905a. *The Cheyenne I. Ceremonial Organization*. Field Columbian Museum Publication 99, Anthropological Series Vol. IX, No. 1.
 ———. G. A. 1905b. *The Cheyenne II. The Sun Dance*. Field Columbian Museum Publication 103, Anthropological Series Vol. IX, No. 2.
 Eggan, F. 1937. 'The Cheyenne and Arapaho Kinship System,' in *Social Anthropology of North American Indians*, pp.35-95, edited by Fred Eggan, 1937. The University of Chicago Press.

Elledge, J. ed. 2002. *Gay, lesbian, bisexual, and transgender myth from the Arapaho to the Zuni: an anthology*. Peter Lang Publishing, Inc.

藤崎康彦 1987 「沖繩のユタと「トランス」」『南島史学』第三十号

1991 「童乩」植松明石編『神々の祭祀』凱風社所収

2003 「多様な性／ジェンダーについての一考察」跡見学園女子大学

文学部紀要 第三十六号

2007a 「ナバホ創世神話の中のナドレ」跡見学園女子大学文学部紀要

第四十号

2007b 「文化研究と神話テキスト」『跡見学園女子大学 人文学フォ

ラム』第五号

2009a 「モハーベのアリハ（ベルダーシュ）」跡見学園女子大学文学部

紀要 第四十二号

2009b 「ベルダーシュの本質再考——モハーベのアリハなどの考察を

通して——」跡見学園女子大学文学部紀要 第四十三号

Grinnell, G. B. 1915. *The Fighting Cheyennes*. Charles Scribner's sons. (Reprinted 1956 by University of Oklahoma Press.)

1920. *When Buffalo Run*. Yale University Press.

1923a. *The Cheyenne Indians*. Volume One. Yale University Press.

(Reprinted 1972. by University of Nebraska Press.)

1923b. *The Cheyenne Indians*. Volume Two. Yale University Press.

(Reprinted 1972. by University of Nebraska Press.)

1971(Originally published in 1926). *By Cheyenne Campfire*. Yale University Press.

Hassrick, R. B. 1964. *The Sioux: Life and Custom of the Warrior Society*. University of Oklahoma Press.

Hoebel, E. A. 1960. *The Cheyennes*. Holt Rinehart and Winston.

1977. *The Plains Indians A Critical Bibliography*. Indiana University Press.
- Kroeber, A. L. 1983 (originally published in 1902, 1904, and 1907). *The Arapaho*. University of Nebraska Press.
- Llewellyn, K. N. & E. A. Hoebel 1941. *The Cheyenne Way*. University of Oklahoma Press.
- Neihardt, J. G. 2008 (originally published in 1932). *Black Elk Speaks*. State University of New York Press. (J. G. ナイハート 1977 『ブラック・エルクは語る』 社会思想社 (現代教養文庫))
- Pitzker, B. M. 2000. *A Native American Encyclopedia*. Oxford University Press.
- Straus, A. 1994. 'Northern Cheyenne Kinship Reconsidered', in *North American Indian Anthropology*. pp.147-71, edited by Demalle, R. J. & A. Ortiz. 1994. University of Oklahoma Press.
- Wishart, D. J. ed. 2007. *Encyclopedia of the Great Plains*. University of Nebraska Press.

注

- 1 これは沖縄や台湾などのシャーマン (霊媒) 研究からの発想で、同様の社会的姿勢をアメリカ先住民のベルダーシュにも感じるのである (藤崎 1987, 1991)。彼らがしばしば特別な (霊的な) 力の持ち主とされることもシャーマンと同じような位置づけを受けていることと関連しているように思う。
- 2 ナバホの「男女の分離」を物語る神話では、ベルダーシュが男の赤子たちの育児をする話がある (藤崎 2007a)。これはいわば非日常的な神話的世界の話であると言えるかもしれない。
- 3 グリネルは専門としては動物学の研究者であったが、その関心は人類学的で、一八九〇年のシャイアンとの最初の出会いからその死の一九三八年まで、半世紀

にわたりシャイアン (とその他の平原インディアン諸部族) と関わり続けてきた研究者である。その二巻の *The Cheyenne Indians* は基本的な古典として評価されている。

4 クローバーによるアラバホ族の民族誌の中で、アラバホ族のインフォーマントがシャイアンのベルダーシュについて述べている (Kroeber 1983:19-20)。クローバーが現地調査できた頃には先住民たちは白人がこういう習俗と人物を嫌悪していることをよく知っているので、質問されても自分たちのこととしては否定して話さず、他の部族については話すということは普通であつたろうと思われる。そのような脈絡で出てきた情報であろう。ドイツ系の教養人であるクローバーは、以下のような、特に男色的なことを英語でそのまま書くことに心理的抵抗があつたらしく、この部分だけラテン語で書いている。すなわちシャイアンには声と生殖器官が男であるのに女性の服装をして生活しているものがあること、服装から妻であることが分かるものもあること、男性に対して肛門性交をさせることがあること、などを本稿の脈絡では必要な情報として確認しておけば足りる。

なお、ラテン語部分については本学高野彰教授の教示を受けた。記して感謝申し上げる。しかし、本稿で引用するに際しての責任はすべて筆者にあり、記述に誤りがあるとすればそれは筆者が負うべきものである。